

# 母の 665 ひろば

doshinsha / haha no hiroba



ことばのなかのこどもたち③／今井和子 2  
とっておきの一作③／和歌山静子 3  
『うみからきたおとこのこ』刊行記念  
「堀内誠一の紙芝居の世界」／堀内花子、堀内紅子 4  
『たたたん たたたん』刊行記念対談／内田麟太郎、西村繁男 6  
新刊紹介／長野麻子 7  
イラスト／丸木ひさ子

## 長命無欲無名の母の導き

黒田杏子

ちやうめい むよく む めいおうしやうはくぎんが  
長命無欲無名往生白銀河 杏子

ときどきこの句を憶えていて下さる方にお目にかかることがあります。父母のことです。昔、「俳句王国」というNHKのテレビ番組で発表し、画面にこの漢字ばかりの1行が映し出されたからでしょう。

私は今年の8月10日に満81歳になりました。父は88歳、母は95歳で文字通り大往生。両親は5人の子どもを育て、ひとりひとりに惜しみない愛情を注いでくれました。私には姉兄妹弟がひとりずつ。全員がびたりと3歳ちがい。私は5人のまん中で実に愉しい子ども時代を過ごし、いい思い出にたっぷりと恵まれていることを嬉しく思います。

母が私を産んだのは31歳のとき。明治40年生まれにしては母はめったに居ない女性であったと思います。若い時から短歌に打ち込み、戦時疎開で東京から父の郷里・栃木県で暮らすようになってからは俳句に打ち込み、亡くなる間際まで句を作り、句集も2冊出しております。謙虚で人に尽くす人でした。

母はとにかく読書家でした。夜間の往診に出かけた父を待って、冬期は炬燵に腰を据え、何冊もの本を傍らに積み上げて本を読み耽っていました。夜中にお手洗いに起きて、そっとのぞくと、うっとり幸せそうに頁をめくっていた母の横顔がとても美しく尊い感じがしたことを中学生の私は誇らしく思っていました。

私は母のすすめで東京女子大学に入学、いわゆる60年安保闘争の時代。これも母のすすめで、学内の俳句研究会「白塔会」に参加。生涯の師山口青邨門下となりました。学生セツルメントのサークルにも入り、反安保の国会デモにも参加。1学年上の東大4年生の樺美智子さんが国会構内で機動隊と対峙、命を落とされました。6月15日の事。この年の夏休みに学生セツルメントの有志が、北九州・大牟田市三井三池鉱山第1組合の子ども達を支援に行く計画が発表され、参加を求められました。参加を希望した私は母に手紙を書きました。即、速達が届きます。封書です。

「お母さんは杏ちゃんの希望と行動に賛成します。炭鉱住宅というところで夏休みを暮らす。これは貴女の人生にとって、またとない貴重な体験。こののちの杏ちゃんの人生にとって宝ものになります。ぜひ行ってらっしゃい」

母の名前は齊藤節。常に私を前へ前へと導いてくれる存在でした。そんな母からの手紙は、葉書も封書もすべて捨てられず、ずっと大切に保管しています。その分量はかなりのものになるのですが。

(くろだ ももこ／俳人)

# ことばの

## なかの

### 3

## 今井和子

# こどもたち

いまい かずこ／子どもことば研究会代表。二十三年間の保育士勤務ののち、立教女学院短期大学教授などを歴任。主な著作に『0歳児から5歳児へ行動の意味とその対応』(小学館)、『子どもことばの世界』(ミネルヴァ書房)などがある。

●りゅう君(五歳) トイレから得意げな顔をして出てきて……

「ぼく うんこで

“し” かいちゃった」

うんと力んで出たうんこが、ちょうど「し」の字になったと言んでいるのです。

### 子どもは「ユーモアの天才」

私が三十数年も子どもたちの言葉の記録をとり続けられたのは、何となくも子どもことばの面白さに魅了されてきたからです。保育の仲間たちと子どもことばを持ち寄り報告しあっているといつもどっと笑いが起こります。なぜでしょう？ 一つには、聞き違いや勘違いから生じる面白さ。もう一つは、子どもが本来的に持っている楽観性なのでしょう。子どもはユーモアの天才なのではないでしょうか。

子どもたちと食事をしていたり、そう君(五歳)が思わずおならをしました。

「あれっ、おしりか わらっちゃったー」

子どもたちのこんなユーモアのセンスを、わたしたち大人もぜひ学びたいですね。

## とっておきの一作 ③

## 紙芝居

## との

## 五十年間

## 和歌山静子

わかやま しずこ／一九四〇年京都府生まれ。主な作品に「王さま」シリーズ（寺村輝夫・文／理論社）、『くつがいく』など多数。紙芝居『ころんこっつんこ』（ともに童心社）で第五十七回高橋五山賞を受賞。



『ころんこっつんこ』  
堀尾青史／脚本 和歌山静子／絵 一九八三年刊行

小学校の入学式でもらった十二色のクレヨンから、私の絵を描く人生は始まりました。来年八十歳になりますが、まさか絵を描くことがここまで続くなんて、夢にも思っていないませんでした。

絵本と同じように、たくさん紙芝居を描いてきました。少なくとも五十作品以上の紙芝居を描いています。

紙芝居を描くにはいろいろな技を使って、絵本にはない広がりを実現することができます。むしろ絵本とは違う世界を作りたいと思い、私もさまざまな作品で、紙芝居と、そして紙芝居の舞台と格闘してきました。

紙芝居の制作は悪戦苦闘の連続です。絵本にはないさまざまな制約があるのも、その一因でしょう。でも、たくさん挑戦の中で、紙芝居としても新しいと思える表現を生み出すこともできました。例えば、終わりの場面と最初の場面がつながる作品（『ともたちだーれ？』や、最後の場面から一つ前の場面に戻って終わる作品（『ころんこっつんこ』）などです。

ところが、私の描いた紙芝居の中で、最も重版を繰り返して、長く読み継がれている『ころんこっつんこ』の『ころんこっつんこ』の作品だけは、すらすらと描けたという思い出しが残っていないのです。ああしよつ、こっつしよつと工夫することも、絵で勝負しよつと意気込むこともなかったよつに思います。苦労した記憶がないのです。

ただ猫が大好きだという思いそのままに、しろねちゃんを描くだけでした。

そうした素直さが、見る人の心に、すーっと入っていつてくれたのではないかと、そう思っています。

『ころんこっつんこ』の脚本を書いたのは、堀尾青史さんです。あまりお話しする機会はありませんでしたが、幼児教育紙芝居の基礎を築いた紙芝居の第一人者です。そんな堀尾さんが、こんなことを書いています。少し長いですが引用します。

紙芝居は演劇や映画のようになが長時間、たくさん的人物を出してやるものではなく、たかだか十二場面（一〇分）から二〇場面程度ですし、相手が子どもなのだから複雑で理解できぬものは問題になりません。性格も事件も明確に認識させるために、一にシンプル（簡明）二にも三にもシンプル・シンプルというのが劇の場合でもいわれていますが紙芝居はなおさらです。

堀尾青史「紙芝居のドラマツルギー」『月刊絵本』一九七八年七月号（所収）  
ここに書かれている堀尾さんの言葉の数々は、私の絵——特に『ころんこっつんこ』の絵にぴったりですね。

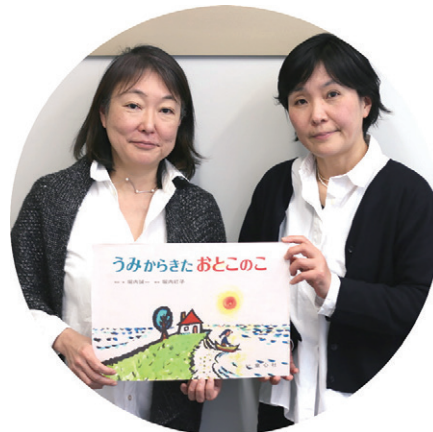
八十歳になる来年も「二」にも「三」にもシンプル・シンプル」な紙芝居を作ります。



堀内誠一（ほりうちせいいち）／一九三二年東京都生まれ。グラフィックデザイナー、絵本作家。主な絵本に『くるんぱのよつぢえん』『こすすめのはつげん』『せに福音館書店』『さらいぼんじいさか』『あかね書房』『あかいかさがおちていた』『紙芝居』『したきりすずめ』『ごぶたのマーチ』『堀内誠一のながくつをはいたねこ』（いずれも童心社）などがある。数多くのロングセラー絵本を世に送り出し、五十四歳の若さで急逝するまで、広告、雑誌、絵本などさまざまな分野で活躍し多彩な仕事を残した。



# 『うみからきた おとこのこ』刊行記念 「堀内誠一の紙芝居の世界」



（左）堀内花子さん（右）堀内紅子さん

七〇〜八〇年代の雑誌の黄金時代を築いたアートディレクターであり、多くのロングセラー作品を描いた絵本作家でもある堀内誠一さん（一九三二〜一九八七）。今月、未発表の紙芝居作品『うみからきたおとこのこ』が刊行されました。堀内さんのご長女の花子さん、ご次女の紅子さんにお話を伺いました。

——『うみからきたおとこのこ』の原画は、昨年、フランスの図書館で見発見されたと同じました。

花子さん（以下、花） 去年の春、何人かの方々から、パリ郊外クラマールにある児童図書館「小さな丸い図書館」（Boutique Bibliothèque Ronde）が連絡を取りたがっていると知らせを受けました。直接やり取りをしたところ、図書館に父が描いた紙芝居が今も残されていると知りました。たまたま八月にパリに行く予定があったので原画を見に行ったところ、その面白さに驚きました。『うみからき

たおとこのこ』は、一九七三年に父が一人でパリに滞在していた時に描かれたものでした。

当時、翻訳家の山口智子さんの紹介で、父は「小さな丸い図書館」に通うようになりまし。フランスとヨーロッパの新旧の絵本の蔵書が豊富なこの図書館に、父も魅了されたのでしよう。

その時の図書館の館長が、日本の図書館関係者にも有名なシュヌヴィエーウ・パットさんだったのです。パットさんはバスケットに絵本を入れて公園に行き、子どもたちに読み聞かせをしながら、図書館に子どもたちを招くといった活動をはじめ先駆者です。それを見た父は図書館へのお礼も兼ねて、この紙芝居を描いたのだと思います。

**紅子さん**（以下、紅） その頃パリの出版社から紙芝居を出そうという話があったんです。父の気持ちも、この時期、紙芝居に強く傾いていたのだと思います。結局、コストがかかりすぎる為に当時は出版できなかったのですが、そこで制作したのが、のちの『堀内誠一のながぐつをはいたねこ』でした。（※1）

この『うみからきたおとこのこ』は印刷出版を想定したのではなく、お世話になった図書館へのお礼として、子ども

たちに楽しんでもらえるように描かれたものようです。

**花** 父は幼い頃、紙芝居を見て育ちますし、この直前に紙芝居の『したきりすずめ』を描いてもいます。ごく自然に思いつき、仕事抜きに父が楽しんで勢いよく描いたことがわかる筆致ですね。

——この『うみからきたおとこのこ』はどのように作られたのでしよう？

**花** 物語は、元々デンマークの民話だと聞いています。日本では、一九六九年に絵本『海からきた力もち』（神宮輝夫・再話／ポプラ社）が刊行されていました。この物語を父は気に入っていたんですね。フランスの子どもたちに紙芝居を作るにあたって、この絵本の記憶を元にしつつ、自分なりの解釈を加えたようです。父がこの話を選んだのは、民話や男の子の成長物語が好きだったからだと思います。

**紅** 脚本は紙芝居を演じる際に、父が口頭で山口智子さんに伝え、フランス語に訳して実演していたようです。このため、原画とあわせて残されていたものは、紙芝居の脚本というよりも、図書館員向けのあらすじみたいなものだけでした。今

回の脚本は、そのあらすじと絵を元に、できるだけ自然な展開を心がけ、紙芝居の特性をいかしつつ改めて書き直しました。つじつまがあわない場面を見直したり、ドラマチックに紙芝居としての効果が高まるよう、擬音やセリフなどを意識して、脚本全体をつくりあげていきました。編集の方が保育園で試演するのを見せたいので、気づかされることも多かったです。四歳と五歳のクラスの子どもたちに見てもらいましたが、反応をよく見ていると、おおむね集中してくれているものの、こは少し文章が長いのかなといったこともわかり、よかったです。

——お二人の考えるこの作品の特徴や魅力を教えてください。

**花** 父は自伝に、幼い頃に見た紙芝居の記憶を書いており、どこでどう盛り上げて、おもしろがらせたいのか、紙芝居のコツはよくわかっていたのではないかと思います。場面ごと「ほひほひ、ここを見てごらん」と、すくく乗って描いていたのがわかりますね。子どもたちに試演してみても、画面の色や遠近感があるせいか、ちよつと長めにもかかわらぬ面白く見てもらえたようです。なぜ

父がこの話を紙芝居にしたかったのか、わかるような気がしました。

**紅** 主人公のオラフは、子どもたちにとっては応援したくなるような、かわいい男の子なんですけど、少し不気味さも持っていて、悪魔との戦いでは、怖い半魚人の姿にもなります。怖さが魅力でもあるんです。そういう点では大人でも楽しめる作品かもしれません。父も大いにエンターテインメント性があるものにしたと思っています。

**花** 自伝の中でも紙芝居については、怪談など、当時の見世物小屋的な思い出とともに書かれています。父の中では、猥雑さも含めて、絵本よりも紙芝居の方が、自由なものという思いがあったのかもかもしれません。絵本では許されなくても、紙芝居だったらできることを確かめているような気がします。

#### ●註釈

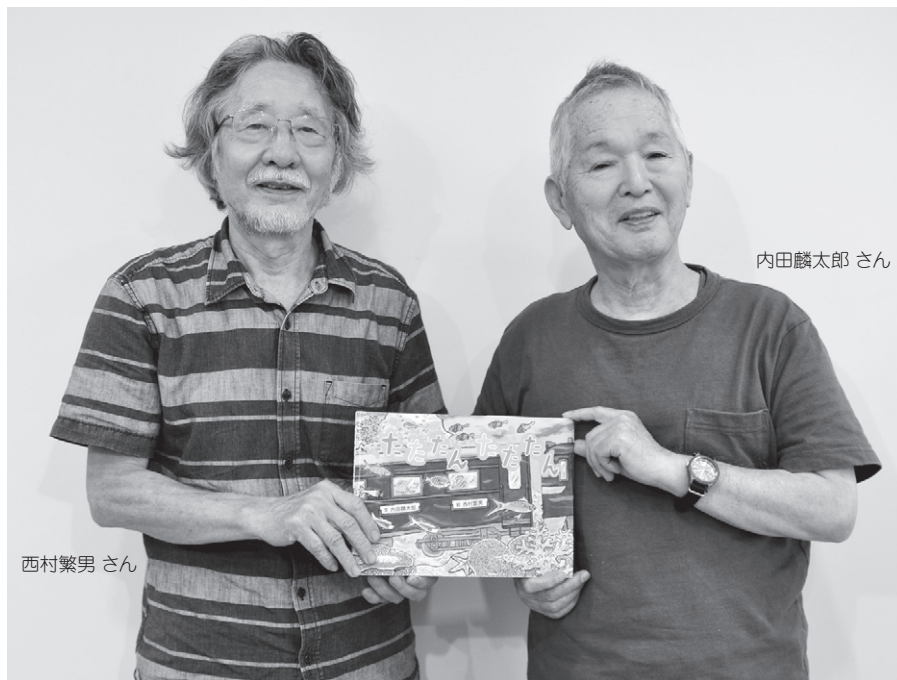
（※1）この原画は、二〇〇八年にパリで見発見され、二〇一一年に童心社から刊行されています。



がたごと がたごと  
1999年4月刊行 本体価格 1300円+税



たたたん たたたん  
2019年9月刊行 本体価格 1300円+税



内田麟太郎 さん

西村繁男 さん

# 『たたたん たたたん』刊行記念対談 内田麟太郎×西村繁男

対談全文はこちらからご覧いただけます →  
<https://www.doshinsha.co.jp/tatatantatatan/>



— 初めのお二人のコンビ作『がたごと  
がたごと』から20年。その続編『たたたん  
たたたん』が9月に刊行となりました。

**内田** ●『がたごと がたごと』は私にとっ  
て画期的な絵本でした。誇張法を使わない  
ナンセンス絵本の方法を極限まで考え、ど  
うアホらしいことに至るのか……。自分の  
世界がひとつ広がった作品でもあるんです。  
**西村** ●僕はそれまで『おひろやさん』や  
『やごっれっしゅ』(ともに福音館書店)な  
ど、実際にあるものを取材して観察して絵  
本にしてきたんです。でも、ずっと物語絵  
本を作ってみたいという気持ちもあったん  
です。文章や物語を作るのは苦手だけれど、  
最初からあるテキストにイメージを膨らま  
せて遊ぶようなかたちならできるかもしれ  
ない——そう思っていたところに、タイミン  
グよく『がたごと がたごと』の原稿が、  
内田さんから届いたんです。変わりたいと  
思っていた僕に、待ってました！ という  
作品だったんですね。『がたごと がたご  
と』は、僕を別のところに運んで行ってく  
れた作品なんです。

た。西村さんとの絵本ということでも思いを  
めぐらせていくと、いくつかアイデアや  
絵が浮かぶのです。けれどイメージの中の  
電車は進んでいかない。私の場合、電車を  
走らせる「音」が決まるのが重要なので  
す。今回「たたたん たたたん」という音を  
思いつき、それにより私の気持ちも電車に  
乗せることができ、書き進めていきました。  
**西村** ●僕は内田さんの原稿がくるのがうれ  
しいからね。内田さんの原稿が入ると、内  
田さんが思っていることと、どう別のこと  
を返せるかというのが僕の課題なんですよ。  
こうやって内田さんが喜んでくれるかな  
ということをやれるわけです。

**内田** ●西村さんとは、気心の知れた仲だか  
らね。「こういうの書いちゃうと西村さん  
困るかな」と自分をセーブすることがない  
ので、いろいろと書いていけるんですよ。  
やっぱり絵と文がうまく出合えたんじゃな  
いか、そう思いますね。私の文と西村さん  
の絵ではじめて絵本という作品になる。

私たちがふだん生きているのは、テーマ  
や物語がある世界です。時にはそこから抜  
け出して、ナンセンスの世界を心からやか  
に楽しんでもらえればと思います。何ごと  
にも、そんなに力まずに。だから『たたた  
ん たたたん』の最後で、いつもは怖い顔  
をしている二人を、温泉に入らせたんです。  
脱力ですね。

## 『おつきさまひとつづつ』のちいさいあこちゃん

長野麻子



おつきさまひとつづつ

長野ヒデ子 / 作  
本体価格 1,300円+税

「おかあさん、おつきさまってアメリカにもある?」「うん」「じゃあ、イギリスには?」「あるよ」——私が4、5歳くらいの時、母とこんな会話を交わした。『おつきさまひとつづつ』の「ちいさいあこちゃん」は私のことだ。月がひとつしか存在しないことを知らず、ましてや広い地球のどこから見ても同一の月であることなど想像すらできなかった幼児の私は、暗い夜空から自分を包み込むように照らしてくれる月に愛着を抱き、素朴な疑問を口にした。ところが母にはそれがよほど印象的だったらしく、私が成人した今でもこの会話が掘り起こされる。そして40年余りの時を経て、絵本になって驚いた。

『おつきさまひとつづつ』の中で、母は何を描こうとしたのだろうか? 月夜の下を歩くと、おつきさまと一緒に歩いてくのがうれしいあこちゃん。世界中の国におつきさまがひとつずつあるのかと不思議に思い、おかあさんに尋ねるあこちゃん。無邪気で突拍子もないあこちゃんの言葉におかあさんは共感し、「あるわよ」「そうね」「ほんとね」とありのままに受け止め、肯定してくれる。そして、あこちゃんと世界のあちこちの夜空に月がたたずんでいる様子を思めぐらす。

あこちゃんの月への思いは子どもらしく、偽りが無い。実際、地球から1番近い距離の天体である月は、地球にはかりしれない影響を与え、あらゆる生き物の生活や存在に作用する。ちいさいあこちゃんは、もちろんそんなことなど分からないが、そのような思いに至るのは、月がそれほどにもあこちゃんの心を動かし、大きく作用しているからなのだろう。自然の力はすごい。子どもの心を一瞬にして捉える。だからこそ、おかあさんもそういう時、「月はひとつしかないのよ」と言わず、「ひとつづつ」というあこちゃんの言葉に特別な意味を見出し、「そうね」と言ってくれたのかもしれない。

今や2人の娘を子育て中の私は、幼児期の子どもの言葉がいかに衝撃的で印象深いものであるかを目の当たりにする。この間、レストランで使用禁止のトイレに遭遇した4歳の次女は、「なんで? あけたら、へびがいっぱいでくる?」と真顔で私に尋ねた。吹き出しそうになるのをこらえて、「じゃあ、あけてみようか?」と提案したら、彼女はよりいっそう真顔になり、拒絶した。子どもの想像力たるやとてつもない。娘たちの月への興味や疑問も尽きない。空に月が見えただけで興奮し、月に何か呼びかけている。そして、十五夜のお月見を何より楽しみにしている。幼い娘たちのそんな姿を見て、ちいさいあこちゃんのおかあさんの気持ちが分かる。そして、おつきさまがみんなにひとつずつあってよかったと心から思うのだ。

(ながの あさこ / 東京成徳大学教授)

# 10月の新刊紙芝居と図書!

堀内誠一の紙しばい

## うみからきた おとこのこ

堀内誠一／再話・絵

堀内紅子／脚本

本体価格 3400円+税



ある日、かじやのところにやってきたおとこのこ。それは、かじやと人魚の息子でした。大きくなったおとこのこは、旅に出て……。

おいしいともだち

## もちさんがね…

とよたかずひこ／さく・え

本体価格 850円+税



火鉢の上で気持ちよさそうなおもちさん。いいおかおでぶ〜っとふくらんだと思ったら、ぶすっとしぼんで、おかおがきえちゃった!

ハートウッドホテル

## ③ねずみのモナと はじめてのジェラシー

ケイリー・ジョージ／作

久保陽子／訳

高橋和枝／絵

本体価格 1300円+税



お客でにぎわう春のホテルですが、モナはティリーの弟に嫉妬してしまい楽しめません。おまけにホテルが空とぶ天敵にねらわれ!

童心社のおはなしえほん

## きれい きれい!

武田美穂／作・絵

本体価格 1300円+税



きれいきれい、ニンジンきれい。おさかなきれい……子どもの切実な思いを、ユーモラスに描き出します!子どもたちの成長を願う作品です。

童心社のおはなしえほん

## 「へてか へねかめ」 おふろでね

宮川ひろ／作

ましませつこ／絵

本体価格 1300円+税



じいちゃんが子どもの頃から知っている「へてか へねかめ……」は、おふろのとなえことば。3回となえたら体がぼっかぼかに!



イラスト／丸木ひさ子

2019年10月15日発行(毎月刊)

母のひろば 第665号  
定価50円(年600円/送料とも)

発行所: 童心の会  
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6  
株式会社童心社内  
電話: 03(5976)4187  
03(5976)4402(編集)  
編集発行人: 大熊悟  
童心社のホームページ:  
<https://www.doshinsha.co.jp/>  
デザイン: 谷口広樹

### 定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌(無料)と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。購読料金は1年分600円(送料とも)。



### あとがき

●初めて『がたごと がたごと』を読んだとき、なんて面白い絵本なんだ!と感銘を受けました。列車のがたごとというリズムに乗って頁をめくっていくと場面場面の絵が伏線となり期待が高まって、駅に着いたら驚かされて、大笑い……この楽しい作品の続編が出ました。『たたたん たたたん』と、まだまだ列車は走り続けます。やっぱり絵本は楽しいですね! ㊦

●子どものころ、道中で親が発した「東名高速」という言葉を耳にし、即座に「透明」な高速道路を想像しました。道路も壁も透き通っている近未来の風景が今でも忘れられずにいるのは、僕の空想を笑い飛ばすことなく、一緒になって膨らませてくれた親がいたからでしょう。子どもの自由な想像力やユーモアのセンスをともに楽しめる大人でありたいです。 ㊦